

序

人間である私は、豊橋生まれの日本人男性で、サラリーマンであり、心身ともに健常で、これといった宗教もない。さまざまな線引きの末に、できあがった自分の姿です。しかし「日本人」とか「男性」とか、「健常者」とか、はたまた「人間」とかの区分は、DNAや身体的形質の違いにより、自然にできあがったものとみなして、これを使ってよいのでしょうか。

私たちは一人ひとり違います。もちろん相手もそうです。他人に接するとき、「この人はどういう人か」ということが気になります。そして「この人はこういう人だ」と認識し、それに従って対応するでしょう。「この人は、どういう人だ」という線引きをするさい、私たちは、自分の個人的な経験もさることながら、いろいろな知識や情報に基づいて判断を下しています。付き合い方や判断の方法についても、まわりから教えられてきました。その結果、友好的な関係が築かれる場合もありますが、「分け隔て」という言葉で表される場合のように、相手を傷つけることもあります。これが社会的な規模にまでひろがると、差別となってしまうのです。そうならないよう、人間みな平等だから、互いに相手を尊重しなければいけない、自分中心に考えず、相手の言い分をできるだけ斟酌する必

要がある、と誰しも考えています。

相手を判断するというのは、あるカテゴリーを使って、これを語ることであるということが出来ます。「この人は何々人である」「この人は男である」「この人は障害者である」「この人はパート従業員である」というような、あるグループにその人を閉じ込めます。もちろん自分も、そのいずれに入るか入らないかを考えてのことですが。そして、当該のカテゴリーに付与された意味に従い、その人を判断する場面が多いように思います。あの人は何々人だから利にさといとか、あの人は男なのにすぐ感情的になる、とか。

というのも、「女性」、「男性」、「日本人」、「中国人」、「障害者」などという属性は先天的あるいはその実態からして、まぎれもない事実であり、それが行動の源泉となっている、と考えているからでしょう。とくに「民族」や、男女の違いなどは、自然に出来上がったものであり、どうしようもない。だからなにか問題が発生したら、「お互いに尊重しましょう」ということで、解決策を見いだすことしかできない。もちろん、相手のことを理解するためには、自分のこともよく知らなければなりません。

しかし、人と人との間に発生する差別や暴力はいっつこうになくなりそうもありません。とくに「男女は平等だ」「民族は同等だ」といわれて久しいのに、「女性」は泣きを見、「在日朝鮮・韓国人」や「中国人」、他のアジア諸国から来た人たちの人権は軽んじられています。学校でも、人間みな平等であると繰り返し教えられているのに。たぶん本人も「差

別はよくない」「相手のためにやっている」と思っているでしょう。「女性」や「外国人」、「障害者」を軽視するような発言に接すると、これをたしなめようとする人も少なくありません。

差別がなくならないのは、これまでの理解とは違った理由によりこれが発生しているからではないかと考えざるをえません。よかれと思つてやっていることも、他人の人格や行動を否定するようなことに繋がっているようです。どちらかといいますと、感情の行き違いや、実体に関する認識不足、失言というレベルの問題ではなく、こうしたカテゴリーとこれに意味を付与する行為そのものに、問題の発生原因があるように思われます。

「人間」の行動様式を、その人本来にそなわつた資質の発露であると考えてしまうと、差別や暴力の消滅に向けて解決の糸口が見えません。「男というもの、中国人というものは、生物学的にみてそういう本性が備わっているのだから仕方がない。違いを認め、理性でこれを抑止するしかない」ということになってしまいます。

カテゴリーというものを、それ自体に本来備わっている性格が、科学的手法によつて明らかにされ、これを分類し、それに見合った名前が付けられたものと考えればそうなるでしょう。個別には多少の違いはあるが、他のグループとの違いを考えれば、これは一つにまとめることができる。名前が不適切というのであれば、変更すればよい。こう

した営為は、誰にでも一樣に認識される実体がまずあって、それをどのように理解するかという問題にほかなりません。

しかし、「犬」でも「猫」でもそうですが、「人間」というものは、時と場合によりさまざまな姿を見せ、その本性を確かめることなど不可能に近いことも、否定できません。またカテゴリーにしても、ある時代に使われていたものが、別の時代にはなくなる、またある地域のカテゴリーは別の地域では通用しないということもあります。従って、私たちが本性だと理解しているものが、ある目的のために、連続し捉えどころのないものの一部が恣意的に切り取られ、「違い」を際立たせるために編み出されたものではないかと理解せざるをえなくなります。そうなると、差別というものは、カテゴリーそのものにかあり、これを執拗に使用している私たちの営為を変えなければ、永遠になくならないということになります。

他人に接するときには、相手のことを考えながら言葉を選び行動しなければならぬというレベルもあります。しかし、もっと大事なことは、自分はどのようなカテゴリー（言葉）で人を判断しているのか、そしてその言葉は当該社会のなかでどのように作動しているかということを明らかにすることではないでしょうか。そうしないと、良かれと思っでやっていることが、それとまったく逆の方向に作用し、あげくの果ては、自分で自分の首を絞めることになってしまいうことに思いを致すことができなくなってしまう。

以上のような問題意識のもと、第一章では、社会を動かしている力が「男性」によって独占され、「男性」は「男性」しか認めず、「女性」を権力や欲望の対象としかみさない社会にあつて、「女性」は自己を実現するためには「男性」を通してしかおこないえず、こうしてジェンダーが再生産されていることが論じられています。「男はなぜ卑怯者、弱虫、臆病者という言葉に弱いのか?」「男はなぜカネと権力に弱いのか?」「なぜ女は嫉妬深いのか?」「なぜ女の敵は女といわれるのか?」という疑問が、男・女という区分を参照することによって使用される言語で構成された「知」の構造を明らかにすることによって解き明かされます。

第二章では、「民族」や「人種」というカテゴリーについて、現在ミャンマーで呼ばれる地域の歴史を事例にして考察されます。人は状況に応じて変化すると考えつつも、その行動や思想を「民族」や「人種」で理解しようとしみます。こうした文化人類学的人間観は、一九世紀末にできあがったことを、この世に「百一の人種」が存在すると考えられていた時代との関連で論じられています。百一の「人種」区分は英領時代においてまったく無視され、独立後においてはこれまた、まったく新しい識別法が使用されるようになった経緯が示され、「民族」や「人種」は実体的ないもので、かつ住民の管理や支配のため、近代になってつくられたカテゴリーであることが明らかにされています。

「民族」というカテゴリーが存在することによって、人が差別され暴力が加えられた事

例として、かつてカナダにおける「日系人」をめぐる問題が第三章で論じられています。とくにここでは、「移住民」がひとつの「民族」として捉えられ、社会の中から締め出されていく過程が示され、これが国際情勢の変化により、「日系人」として囲い込まれ、ついに消滅させられていくことが明らかにされています。カナダは様々な「民族」が共存する多文化主義先進国として知られ、隣国であるアメリカ合衆国とも異なる文化政策を展開しているといわれますが、「文化」という用語をもちいる以上、民族問題の根絶は程遠いように思えてなりません。

そして第四章では「障害者」／「健常者」という線引きについての再検討です。生活の糧は、自分の労働力を売ることによってしか獲得できない社会体制のもとにあつては、これができない者は一人前とみなされません。基本的な人権が尊重される主体であるためには、自分のことは自分でできることが前提とされます。それができない者は「障害者」としてひとくくりにされ、その原因である「障害」についても、当該社会において定められた「健常」とされる基準をもとにして判断されます。ここでは「障害」というものが、客観的に存在するではなく、「国家の集合的利益」にそって発見されていることが論じられます。

そもそも線を引くことによってなされる分類と命名は、「人間」がその時どきにつくりあげた社会的産物であることが第五章で示されます。生物としての「ヒト」について、

「人間」は自己中心的にこれを理解し、みずからの多様性をも無視しようとしていることが論じられます。まず「ヒト」と「ヒト」以外の動物との連続性を否定し、かつ「ヒト」が最も優れているとみなすことが問題であることを進化生物学的に説明されます。そして、生物としての「ヒト」本来に備わった自己中心的性質により、「人間」は外界を「種」などで分類し序列化して、これを生物学によって本質化してきたことが明らかにされています。「ヒト」は多様な存在であるにもかかわらず、「人間」となることによってみずからの都合で自然を分類し、ついには自分自身をもさまざまな枠に閉じ込めてしまうことになったのです。

そして最後に、以上によって示された知見に依拠しつつ、編者による「あとがき」では、近代以降における、人と人を上下にへだて、一方が他方を利用するという社会は、これまで差別の根源とされてきた資本と賃労働の関係のみならず、これと平行して一九世紀ごろから形成されたはじめた国民国家の言語実践によって形成されていることが述べられています。

本書は、愛知大学人文社会学研究所主催のもと、「あなた」と「わたし」の内外をへだてる知」というテーマのもとにおこなわれた連続公開講座の内容を収録したものです。二〇一七年度は「豊橋市民大学トラム愛知大学連携講座」として所員による報告

が四回、二〇一八年度は愛知大人文社会学研究所公開講座として三回にわたり、大澤真幸氏、上野千鶴子氏、姜尚中氏にご登壇いただきました。

二年に及ぶ講座は、順に「民族」、「障害者」、生物分類、ジェンダーをテーマとして進められましたが、ジェンダーに関する講演に、「あなた」と「わたし」の関係を考えるうえでの基本的な視点が示されました。そのため、本書を編むにあたり、これを第一章に配置してあります。従って第二章以下がこの考え方を受け入れ、これにそった議論を展開しているというわけではありません。それぞれは、本講座のテーマを講師なりにうけとめ、独自の視点で内容を構成し、報告がなされたものです。とはいえ結果的には、「民族」、「障害者」、生物分類等に内在する問題は、いずれも個人よりも「国家」を優先する人たちが、「国家」の都合に基づいて線引きをおこない、ものごとを本質化してしまっているところから生じていることが明らかになったように思われます。